暮しが根をはる

調和のある産業をめざして

福生市は昔から多摩地区の商業中心地。「七夕まつり」を関東の一大夏祭りに仕上げたエネルギーと熱意がその発展を支えているのです。市内にはわずかだけれど田んぼや畑もあり、工場もあります。〝住宅都市福生〟と密着し、調和しながら、市の産業の活性化をはかっていきます。

●商店街は駅周辺を中心に新時代へ

福生市の商店は、長いあいだ西多摩地区の表玄関として近郷住民の商業の拠点となってきました。

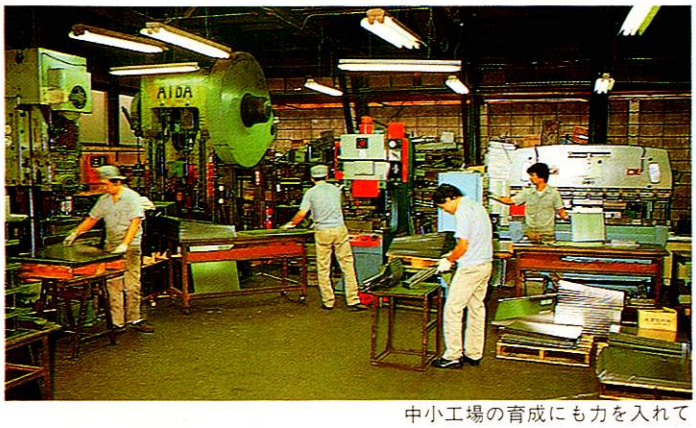
現在商店は1069店あり4752人が従事しており、市内の産業就業者のトップを占めています。(昭和57年商業統計調査)

しかし商店の老朽化や、ショッピング空間の手狭さ、駐車場の不足など、現代人のショッピング需要に対応しきれない部分も生じています。

市では商業体制の近代化、活性化をめざしていくため、福生駅を中心とした新たな商業圏の確保と整備をめざし、東口にバスターミナル、タクシープールなどの交通機関を充実させたショッピングゾーンと市民憩いの場を兼ねた商業圏を整備しました。さらに西口の中央商店街をはじめ、各駅前商店街の整備を推進しています。

「買物が便利で楽しいまち」と主婦たち

多摩地区の新鮮野菜が一堂に会する福生青果市場



中小工場の育成にも力を入れて

観光農園では待ちに待った落花生の収穫

●無公害の都市型工業へ

本市には事業所が2245社あり１万6356人の従業員が働いています。しかし規模は1～4人の企業が大半を占め、100～300人の企業は16社にすぎません（昭和56年事業所統計調査による）。

主婦や中高年者の就労需要も高まっているため、今後は地域に密着した産業として、その役割はますます増していきます。

市では住宅地域に混在している工場等については、適地への集約化と公害のない都市型工業への転換等を検討し、そのために必要な資金の融資、経営指導等に力を入れていきます。

●都市のなかにも実り豊かな土のにおいを

昭和30年初頭までは、全面積の半数以上が農業用地で、さらにさかのぼれば、戦前までは純然たる農村地帯だった福生。都市化の波は急激に農業離れを生み、昭和55年の、農業人口は農家数278戸、1401人となっています。そのなかで専業農家として農業収入だけで自立している家はほとんどなく、大半が勤めを主体にした第二種兼業農家になっています。農業の耕地面積は50.23 haになり、総面積のわずか５％にすぎません。

しかし耕地は、緑地を含む大切な都会のオアシスで、今後はその保全が求められます。野菜、花木、果樹、苗木など都市化に対応した農業を振興し、また市民にとって〝緑と土〟に親しむ憩いの場として育成していきます。

農家の協力と市の負担により確保した「家庭菜園」620区画（1区画10m²）では広く市民が手づくりの野菜、花木づくりなどを楽しんでいます。

また春、秋の２回、農家がつくった新鮮な野菜、穀物、果物などを中心に「朝市」が開かれ、市民に大変人気があります。また市では観光農園にも力を入れ、農家との協力で落花生を栽培しています。秋には落花生掘りとり会も開かれ、好評です。

春、秋の人気催事・朝市風景